

無居住化集落における歴史文化の連続性について Living History and Culture in Uninhabited Villages

○小山元孝* 林直樹** 関口達也*** 齋藤晋****

Mototaka KOYAMA Naoki HAYASHI Tatsuya SEKIGUCHI Susumu SAITO

1.はじめに

山間辺地における集落の無居住化が危惧されているが、筆者らはたとえ集落が無居住化しても歴史文化の連続性が残っていれば、「集落は消えていない」と考えている。そこで、本稿では元住民に対する聞き取り調査をもとに、戦後無居住化に至った集落における歴史文化の連続性について明らかにする。調査対象とした京都府京丹後市内の無居住化集落について、その原因や当時の状況についての調査研究はあるものの⁽¹⁾、無居住化後の当該地域の歴史文化の連続性について注目した調査・研究は管見のところ筆者等のもの⁽²⁾を除くとまだない。

京都府京丹後市は2004年4月に峰山町・大宮町・網野町・丹後町・弥栄町・久美浜町の6町が合併をして発足した。その内、対象となる集落の無い峰山町域を除いた5町から6集落（久美浜町山内、網野町尾坂、大宮町内山、丹後町小脇、丹後町三山、弥栄町住山、図1）を選択し、元住民に対して主に下記の9点について2015年8月から10月にかけて聞き取り調査を行なった。

- 1)無居住化への経緯
 - 2)記念碑や民俗誌の整備状況
 - 3)無居住化したあとの伝統的行事の変化
 - 4)元住民の帰属意識や地元意識の変化
 - 5)神社・墓地等の整理
 - 6)再居住の意向
 - 7)地域の歴史文化の核となる要素とその維持の方法
 - 8)歴史文化の連続性を維持した無居住化の可能性
 - 9)元住民で構成する親睦会の存在、設立経緯
- ### 2.調査結果の要点と歴史文化の連続性

6地区の聞き取り調査の要点については表1のとおりである。詳細については小著を参照されたい⁽²⁾。以下では、歴史文化の連続性について小著で細かく言及できなかった点について述べたい。

その一つは小脇における記念碑である。ここでは地元で大切にされていた地蔵菩薩像を近隣の寺院に移転した後に、現地に地蔵の姿と由緒を刻んだ記念碑を建立しており、その周辺は現

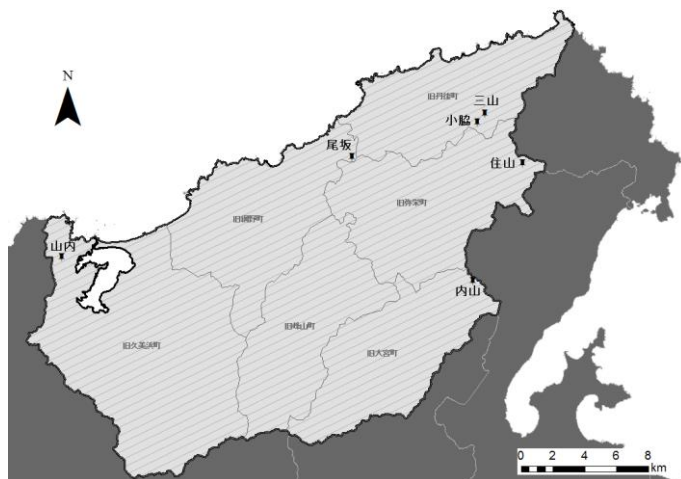


図1 調査先位置図
Fig. 1 Investigation position

* 特定非営利活動法人 TEAM 旦波 Specified Nonprofit Corporation TEAM TANIWA

** 東京大学大学院農学生命科学研究科 School of Agricultural and Life Sciences, The University of Tokyo

*** 中央大学理工学部 Faculty of Science and Engineering, Chuo University キーワード

**** 特定非営利活動法人国土利用再編研究所 Institute of Landuse Reorganization 中山間地域, 集落計画, 無居住化

表1 調査結果の要点
Table 1 The main point of the findings

	山内	尾坂	内山	小脇	三山	住山
①元住民で構成される組織・グループ	△	○	×	○	×	×
②元住民の「第二の集住の地」	×	×	○	×	○	○
③元住民によって実施されている行事	×	○	×	○	×	×
④跡地に残っているシンボルの要素	○	○	○	○	○	○
⑤別の場所に移転させたシンボルの要素	○	○	○	○	○	×
⑥再居住の意向	×	×	×	×	×	×
⑦そのほか、再興の日に向けての備え	○	×	×	×	○	×

○：健在、△：最近になって消えた、×：発見できず/だいぶ前に消えた

在でも草刈りをするなど元住民たちによって管理されている。この地蔵菩薩像は地域の歴史とも密接に関連しており、地蔵を伝え残すことが地域の歴史の連続性を維持することにもつながっている。さらに建立された場所は元公民館前であり、ここでは無居住化後も元住民による懇親会が開催されていた住民たちの憩いの場所でもあった。管理上の理由からやむなく地蔵菩薩像を移転したものの、その姿を模した記念碑を建立するという事により現地に地域のシンボルを復活させたのである。また、その場所の管理をすることにより元住民たちが集うことができ、可視化されたシンボルが重要な役割を担っている。

もう一つは尾坂の記録簿である。ここでは集落が存在していた時代から記録簿が作成され、村の行事や出来事が記されてきた。現在でもその記録簿は書き継がれ、集落に通じる道路の草刈り等が記されている。記録簿という冊子状のものであり小脇での事例とは形態は異なるが、これも歴史文化の連続性を維持するものとして捉えることは可能といえる。さらに、住民自らが地域の歴史を書き記すことは、歴史文化の連続性を維持するための主体性の高い行為として評価すべきであろう。

3.まとめと課題

上記のように、無居住化した集落の中でも様々な形で歴史文化の連続性が維持されている事例を確認することができた。小脇や尾坂では住居場所としての集落は存在していないが、無居住化して約半世紀が過ぎた現在でも歴史文化の連続性が維持されていることは注目すべきである。しかし、無居住化から時間が経過し地域の歴史文化を伝える担い手が少なくなっている。今回、主に元住民10名の方からお話を伺うことができたが、その平均年齢は約80歳であり、今後について不安視する声は多くあった。さらに、次世代への継承も大きな課題となっている。また連続性の形態は集落によって異なっており、その要因を追求することや連続性が保てなかった集落との比較も今後必要と言える。

注

- (1) 向井利栄「限界的地帯の挙家離村をめぐる諸問題」,京都府立大学学術報告(理学・生活科学・福祉学)16号C系列,1965, 坂口慶治「丹後半島における廃村現象の地理学的考察」,人文地理18-6,1966, 高橋達夫「丹後半島における挙家離村と機業」,人文地理22-4,1970, 京都府・丹後地区広域市町村圏協議会『丹後地区広域市町村圏振興整備構想研究報告書』,1976, 多田憲一郎「丹後地域における産業構造の展開と過疎現象」,経済論叢別冊調査と研究4号,1993, 梅本政幸『丹後の国』,1993

- (2) 小山元孝, 林直樹, 関口達也, 齋藤晋『消えない村:京丹後の離村集落とその後』,林直樹, 2015
※本研究は、平成27年度国土政策関係研究支援事業「将来的な再居住化の可能性を残した無居住化に関する基礎的研究：農村再生に向けて」の助成を受けたものです。